

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720145

研究課題名(和文) 20世紀後半ロシア文化における戦争の記憶表象についてのジェンダー研究

研究課題名(英文) Gender Studies on the Representations of War Memory in Russian Culture in the Latter Half of the Twentieth Century

研究代表者

前田 しほ (MAEDA, Shiho)

東北大学・東北アジア研究センター・特任助教

研究者番号：70455616

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：第二次大戦の勝者であるソ連は、冷戦構造の一方の覇者として、戦争の記憶・表象を国民統制の道具として利用してきた。女性は祖国の代理表象として愛国主義喚起に動員された。他方で文芸作品においては伝統的なジェンダー規範から逸脱した女性イメージが、戦争神話に対する異議申し立てとして機能している。そこで、ソ連時代の独ソ戦に関する文学・映画・新聞・プロパガンダポスター、戦争記念碑の調査や資料収集、作家へのインタビューを行い、戦争記憶のあり方と女性の表象の関係性を考察した。これにより、メディアや時代性によって社会的機能が異なること、ナショナリティの観点からはプロパガンダと文芸は共犯関係にあること等が判明した。

研究成果の概要(英文)：After the “thaw,” the Soviet Union accepted a new national identity as a victorious nation, instead of that as a cult of Stalin. It is often said that good propaganda does not force people to be obedient to the establishment, but just shows an idol and urges the public to internalize it by themselves. In that sense, Soviet Russia succeeded in creating a myth about the war. Actually, images of women are much more effective in internalizing patriotism in the mass of people and also intensify their sense of belonging to their community, than images of men. On the other hand, in the literature female images deviate from traditional gender role and protests against national history. I did field work concerning public statue that are remembrances of the war, research on literature, film, newspapers, propaganda posters, and interview with novelists. So far, I have seen that image of women have different effects from the media and the times.

研究分野：ロシア文学・文化

キーワード：戦争 ソヴィエト・ロシア 女性 表象 文学 記憶 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は20世紀後半のロシア文学における女性の創作活動やアイデンティティ、女性イメージについて研究を行っていた。第二次大戦の経験がロシア女性のメンタリティに重要な影響を与えている点に注目して(たとえば、80万人規模の女性の前線動員や銃後の社会進出) 戦争映画・文学を見直したところ、伝統的なジェンダー規範から逸脱した女性イメージが、戦争神話に対する異議申し立てとして機能していることに興味をもった。他方で、プロパガンダにおいて、女性イメージとナショナリティの統合がどのような関係にあるのかという点にも注意を払うべきだと思い、ポスター・絵画・彫刻、特に公共記念碑などを調査した。すると、ソヴィエト・ロシアのナショナル・アイデンティティとして戦争記憶・英雄神話が非常に重要な役割を果たしていること、我が国の戦争観とはかなり異なり、正戦のイデオロギーというべき戦勝の賛歌が優位である中で、女性表象が興味深い現象を示していることに気付いた。

2. 研究の目的

第二次大戦の勝者であるソ連は、冷戦構造の一方の覇者として、戦争の記憶・表象を国民統制の道具として利用してきた。ゆえに戦争を描く文学・映画・演劇は、公式文化の王道として展開したが、その一方で抑圧されたトラウマ的記憶をすくい上げ、検閲と闘う歴史をもつ。本研究は、女性表象と女性作家の創作活動に焦点をあて、ジェンダー論的な観点からアプローチすることで、葛藤や軋轢が内在し、ゆえに神話化と脱神話化の力学が複雑に変容するロシア(語圏)の戦争表象の一端を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 資料収集・フィールドワーク・データベース作成

第二次大戦の独ソ戦に関する文学・映画・新聞・プロパガンダポスター、戦争記念碑の調査、資料収集を行った。戦争記念碑や博物館の展示など現地調査をし、データベースを作成、これを分析して戦争記憶のステレオタイプの抽出を行った。戦争に関する作品は膨大な数に及ぶため、データベース化は現在も続行中である。しかしこの作業を通じて、全体像がつかめてきた。その上で、重要と思われるテーマやモチーフを抜出して、分析し、論考として整理している。またこれと並行してスヴェトラナ・アレクシエーヴィチ、ゲルマン・サドゥラエフ、ドミトリー・ノヴィコフ等現代ロシアの戦争作家へのインタビューを行った。

(2) 分野横断的なアプローチと文化的枠組み

の検証

ソ連の戦争記憶が現在に至るロシアのナショナル・アイデンティティの基盤として機能している点からいうと、文学研究とジェンダーのアプローチだけでは不十分だと考え、ソヴィエト文化論、記憶学、文化史、歴史学、社会学、宗教学、オーラル・ヒストリー研究、デザイン、表象、エスニシティなど周辺領域にも目を配った。その上で、歴史的経緯を整理しながら、戦争体験の想起と忘却が社会的文化的にいかにか構築されているか考察を積み上げている。

(3) 英語圏の最新の研究の把握

我が国ではほとんど行われてこなかったが、ソ連の戦争記憶研究は英語圏では、20年以上の蓄積がある。そこで、英語圏での先行研究や最新の研究動向を調査・資料収集を行った。

4. 研究成果

(1) メディアと女性イメージの社会的機能を分析・考察した。研究対象をテキスト=閉鎖的な独立した空間として扱うのではなく、連続した社会的文化的なコンテキストとしてのテキスト群とみなし、特定のイメージがジャンルを超えて社会的文化的にいかにか構築されているか明らかにすることを心がけた。まず、母、妻、看護婦、女性兵士、勇敢な兵士像などテーマ設定を行い、ポスター、映画、文学、絵画、彫刻等の複数のメディアにおいて、それらのイメージがいかにか変遷したのかを追うことで、戦争神話の枠組みを明らかにすることができた。例えば、戦前・戦中のプロパガンダポスターは、女性の労働力を市場・戦場に引き出すために、非対称的なジェンダー構造を内蔵しながらも、見た目の「平等」を訴えるイメージが主流である。これに対し、戦後の記念碑では、女性は亡くなった兵士を悼む母として視覚化され、母性が強調される。このように、女性のイメージを分析することによって、国民化の方向性が時代によって異なること、またメディアの社会的機能と時代性が明確に見えてきた。

(2) プロパガンダと文芸の敵対/共犯的關係を洗い出す

研究開始当初は、プロパガンダと文芸の世界は対立関係にあると考えていた。確かにそのような一面はあるものの、メディアを超えて幅広く分析すると、一種の共犯関係がみえてきた。特に、ジェンダーの観点からはこれが顕著である。女性を劣位に置く形で、理想の女性像を提示し、現実の女性の国民化に働きかける点では共犯関係にある。男性作家の作品はこの点に無自覚であり、「男らしさ」の創造のため、女性は他者化される。例えば、兵士は勇敢に闘い、亡くなくても、看護婦の恋人は戦後独身を貫き、遺児を立派に育てる。このような戦後量産されたこの種の物語の

特徴は、第一に、闘う女=女性戦闘員は描かれない。第二に、男が死ぬが、女は生き残り、英雄を悼む。第三に、女は恋人としても(魅力的な脚線美)妻としても(貞淑)、母としても(子を育てあげる)男性にとって都合の良いイメージに溢れる。その点で、イ・グレーコワ『未亡人たちの船』やスヴェトラナ・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』など女性の作家は、ソ連の近代的家父長制にメスをいれる。グレーコワのヒロインは、看護婦として従軍したにも関わらず、野戦病院で恋におち、妊娠して銃後に送り返される。アレクシエーヴィチも性的・生理的なことを含む、女性兵士の戦地体験を生々しく伝えた。

また男性作家の創作においても、1970年代後半以降徐々に、セクシュアリティの「余剰」が目立ってくる。女性作家のように自覚的ではないが、ソヴィエトの文化コードの揺らぎが「余剰」としてテキストに反映しているのではないかと考えている。そもそも文学・映画には、比較的作家の自由な想像の余地が残されており、「男らしさ」の追求において女性イメージは重要な役割を果たしているのである。

(3)戦争記憶の比較研究

本研究計画ではフィールドワークを計画していたが、国際会議等への参加等も利用して下記のように広範な現地調査を実施することができた。ロシアのみならず、現・旧共産圏、共産圏と敵対関係にある国・地域を調査することで、幅広い視野を養った。ロシアやソ連特有の特徴を洗いだすことができた。共産圏に独特の傾向と共通性があり、現地化して、各地で独自の発展をしていることが分かった。特に独立後、旧ソ連の各地で、戦争記憶の独自性が進む現象が見られるが、ロシア国内でも多様性が見られる。フィールドワークの成果と先行研究を照らし合わせ、地域性を加味しながら、歴史的に戦争記憶がどのように変化してきたのか、全体像を把握することに努めた。その結果、ロシアの独自性を改めて認識することができた。

中国東北部・内モンゴル調査(2012年8月)
アルメニア・エレヴァンとロシア・モスクワ調査(2012年9月)
中東欧(ブダペスト、ブラチスラヴァ、ミンスク)調査(2013年3月)
ポーランド・クラクフ、ヴロツワフ、ワルシャワ調査(2013年5月)
ロシア・サンクト・ペテルブルグ調査(2013年7月)
ベラルーシ・ミンスクとロシア・モスクワ調査(2013年9月)
ウズベキスタン・ブハラ、タシケントとカザフスタン・アルマトイ調査(2014年6月)

韓国ソウル調査(2014年6月)
アメリカ・サンアントニオのアラモ砦調査(2014年11月)
台湾・台北市と金門島調査(2015年3月)

(4)国際的発信

海外での研究成果発表を重点的に行うという当初の目的は順調に達成することができた。研究期間中に海外で6本の口頭発表を行い、27年度も国際会議での発表を2件予定している。使用言語は英語とロシア語、報告地もロシア本国やアメリカだけでなく、ポーランド、カザフスタン、インド、韓国と多岐にわたり、各地の関心を共有する研究者と交流し、有益な情報を得ることができた。その結果、本研究の課題は国際レベルに照らしても重要で、現在注目される分野であること、成果自体も、オリジナリティが高く、一定の水準に達していることが確認できた。今後も積極的に国際的な発信力を磨きたいと考えている。

(5)研究成果の発表

研究代表者にとって、本研究は新しい試みであったため、調査、資料収集、先行研究収集と読み込み、論考に時間がかかった。口頭発表の形で、学術的な議論の俎上に載せる段階まではもちこめたものの、研究期間中に論文として刊行できたのは3本にとどまった。しかし、近刊予定の2本のほか、査読をパスし、ロシアの中央の文芸誌に共著論文1本、単著論文1本が掲載予定である。本研究を通じて、計画段階では思いもよらなかった様々な新しい知見や発見を得ることができたので、成果は今後もひきつづき論文・単著として発表し、国民への還元を図りたいと考えている。またインパクト・ファクターの高い英語学術雑誌への投稿も課題である。

(6)研究組織活動

当初は想定していなかったが、本研究を通じて、充実した研究組織活動を行い、総合的な研究能力を身につけたことが大きな成果として報告できる。研究会・国際ミニシンポジウムの運営・組織、国際会議のパネル組織、海外調査組織を行った。

本研究と新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」と共催し、2012年7月に研究会「近現代戦の表象比較研究 戦争のメモリー・スケープ」(北海道大学、参加者約50名)のイニシアティブをとって運営・組織にあたった。本研究会で、中国やベトナムの若手研究者と共同研究を発足させ、2013年に科研費の基盤(B)に採択され、比較研究を深めているところである。

科研費基盤研究(B)『社会主義文化における戦争のメモリー・スケープ研究 - 旧ソ連・中国・ベトナム』主催「諸民族の友好」誌共催国際ミニシンポジウム「戦争

の記憶を比較する：ロシア、日本、アジア」(外国文献図書館(モスクワ)、参加者約30名)では、現地のカウンターパートと連携し、共催団体との連絡調整、会場手配、ロシアの現代作家や研究者の招致の交渉等、企画・運営・組織にあたった。国際会議のパネル組織にも取り組んだ。次項の学会発表の は研究代表者が組織した The Media and Medium in the Soviet Cultural System の一部である。参加者との緻密な連絡調整をはかり、コンセプトを共有することで、高い評価を得ることができた。また平成27年8月に幕張で開催予定の The Ninth World Congress of ICCEES でパネル Fighting, Nursing and Lamenting Female Bodies and the Politics of Memory in Postwar Soviet Union, Japan and China を準備中である。

海外での集団調査の組織・運営3本に関わった。本項(3)の である。

(7)以上のように、3年間を通じて、精力的かつ計画的に研究活動を進めたといえる。興味深い知見を得ることができたので、今後本研究の成果を論文や著書としてまとめ、発表することが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

前田しほ、スターリングラード攻防戦の記憶をめぐる闘争：象徴空間としての戦争記念碑、思想 No. 1096、2015年7月刊行予定(印刷中)、査読無

前田しほ、ロシアの戦争記念碑における兵士と母親イメージ：国民統合のジェンダー・バランス、地域研究 Vol. 1、No. 2、2014、pp. 17-42、査読有

前田しほ、書評論文ワシリー・グロスマン(斎藤紘一訳)『人生と運命』、ロシア語ロシア文学研究 Vol. 45、2013、pp. 272-278、査読有

前田しほ、2010年代の幕開けを垣間見て：現代のロシア文学事情、現代ロシア文学とスターリニズム Vol. 2、2013、pp. 35-45、査読無

[学会発表](計9件)

MAEDA, Shiho. Images of Nationalities and Gender strategies: War Monuments and Memorials in Russia, The 46th Annual Convention ASEES, 2014年11月22日、San Antonio Marriott Rivercenter (San Antonio(米国)) 査読有

前田しほ、後期ソヴィエトにおける独ソ戦記念碑の表象と機能、2014年度日本ロシア文学学会研究発表会、2014年11月5

日(山形大学、山形市)査読有

MAEDA, Shiho. The Image of Nurses of the Great Patriotic War in Soviet Popular Literature and Visual Media, The 6th East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, 2014年6月28日、韓国外国語大学(ソウル(韓国)) 査読有

Маэда Сихо (前田しほ), О возможности русской женской литературы(ロシア女性文学の可能性について)、国際文学フェスティバル ПОЛИФОНИЯ, 2014年6月6日、カザフ民族楽器博物館(アルマティ(カザフスタン)) 査読有、招待講演

Маэда Сихо (前田しほ), Изображение женщин в мемориалах о войне(戦争記念碑における女性のイメージ)、科研費シンポジウム「戦争の記憶を比較する：ロシア、日本、アジア」、2013年9月11日、外国文献図書館(モスクワ(ロシア))、査読無、招待講演

Маэда Сихо (前田しほ), Альтернативное изображение

женщин в русской литературе 80-х годов(1980年代のロシア文学における女性のオルタナティブなイメージ)、XII Международная конференция славистов. Большие темы культуры в славянских литературах. Чувства、2013年5月17日、ヴロツワフ大学(ヴロツワフ(ポーランド)) 査読有、招待講演

前田しほ、ロシア・中国の記念碑に見るジェンダー構造、新学術領域研究総括シンポジウム「ユーラシア地域大国の比較から見える新しい世界像」2013年1月26日(早稲田大学(東京都))、招待講演

MAEDA, Shiho, Gender Hierarchy in Representation of War in Soviet Culture and Literature in the Second Half of the 20th Century, Forth East Asian Conference of Slavic-Eurasian Studies, 2012年9月5日、マウラナ・アブル・カラム・アザド記念アジア研究所(コルカタ(インド)) 査読有

前田しほ、大祖国戦争表象のジェンダー・ヒエラルキー：共同体を統合する『母』の慈愛、新学術領域研究会「近現代戦の表象比較研究 戦争のメモリー・スケープ」2012年7月15日、(北海道大学(札幌市)) 招待講演

前田しほ、大祖国戦争表象のジェンダー・ヒエラルキー：共同体を統合する『母』の慈愛、新学術領域研究会「近現代戦の表象比較研究 戦争のメモリー・スケープ」2012年7月15日、(北海道大学(札幌市)) 招待講演

前田しほ、大祖国戦争表象のジェンダー・ヒエラルキー：共同体を統合する『母』の慈愛、新学術領域研究会「近現代戦の表象比較研究 戦争のメモリー・スケープ」2012年7月15日、(北海道大学(札幌市)) 招待講演

前田しほ、大祖国戦争表象のジェンダー・ヒエラルキー：共同体を統合する『母』の慈愛、新学術領域研究会「近現代戦の表象比較研究 戦争のメモリー・スケープ」2012年7月15日、(北海道大学(札幌市)) 招待講演

[図書](計1件)

Маэда Сихо (前田しほ), 埼玉大学 Гречко В. и др [編] Дальний Восток, близкая Россия: эволюция русской культуры с евразийской перспективы. 2015. (Narrative и репрезентация женщины на войне. Миф войны и публицистика С. Алексиевич «У войны не женское лицо») (女性兵士の語りと表象：戦争神話とアレクシエーヴィチの「戦争

は女の顔をしていない」) C. 137- 151.
2015年6月刊行予定(印刷中)

〔その他〕
ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前田 しほ (MAEDA, Shiho)
東北大学・東北アジア研究センター・特任
助教
研究者番号：70455616